

鈴木正氣実践「久慈の漁業」（小学5年社会科）における

アクティブ・ラーニングについての検討

白尾裕志

Hiroshi SHIRAO

琉球大学大学院教育学研究科高度教職実践専攻

Analysis of social studies teaching practice by the view of active learning: "The fisheries industry in Kuji" for the 5th grade student in elementary school by Suzuki Seiki

要約

次期学習指導要領では、教育内容としてのコンテンツの上位に目指すべき資質・能力としてのコンピテンシーを掲げる教育課程の構造を示している。中でも「アクティブ・ラーニング」は、資質・能力の目標を達成するための有効な手段として注目されている。アクティブ・ラーニングは汎用的な能力を育成するための能動的な学習であり、これまでも実践されてきた。本論ではこれまでの優れた教育実践の中から鈴木正氣による小学5年生の社会科授業実践「久慈の漁業」を取り上げ、アクティブ・ラーニングの視点から分析することで、汎用的な能力の育成を可能にする授業実践に必要な条件を明らかにすることを試みた。「久慈の漁業」で討論が成立した理由について、子どもの認識を使った授業方法、学級集団づくり、教材構成の視点、指導計画づくりの視点から分析を行った。それらは教師の先行した社会認識と深い教材研究に基づく教科の特質を踏まえた教材構成と集団づくりを通じた学級経営が共通の基盤となっていた。最後に、「書く」ことによってより明確になった自らの社会認識に基づいて討論の授業を組むことで、より活発で主体的な討論の授業が成立することを示した。こうした条件のもとで社会科実践「久慈の漁業」が成立して、討論を通して思考力を高め合う汎用的な能力の育成につながった。

キーワード：アクティブ・ラーニング 汎用的な能力 授業方法 討論 社会認識 指導計画 書く

The curriculum which inserts the quality and the ability in dominance of education contents is indicated by the next curriculum guidelines. "Active learning" is watched as the effective means to achieve a goal of the quality and the ability in particular. Practice of social studies of a 5th grader of elementary school by Suzuki Seiki. It was analyzed from the angle of the active learning, and I tried to indicate the condition necessary to the class who can bring the general-purpose ability up. A child was analyzed about a class way using recognition, classroom group making, the angle of the composition of teaching materials and the feature of the plan forming as the factor which could be discussed by "The fisheries industry in Kuji". The class of social studies "The fisheries industry in Kuji" through discussing got in touch with upbringing of the thinking power by such condition.

1, 問題と目的

「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ(案)」(文科省 2016,pp. 40-41.) (以下,「審議のまとめ(案)」)では,学習指導要領改訂の基本的な方向性として,教育課程編成に言及して次のように記している。

「次期学習指導要領等については,資質・能力の三つの柱を骨組みとして,教科等と教育課程全体のつながりや,教育課程と資質・能力の関係を明らかにすることとしている。これは教育課程について,教えるべき知識や技能の内容に沿って順序立てて整理するのみならず,それを学ぶことでどのような力が身に付くのかまでを視野に入れたものとするということである。」

これは,学習する知識を系統的に整理した教育内容としてのコンテンツの上位に目指すべき資質・能力としてのコンピテンシーを掲げる次期学習指導要領の下での教育課程の構造を示しており,「審議のまとめ(案)」全体の一貫した基調となっている。またこの構造を実現するために「社会に開かれた教育課程」として「カリキュラム・マネジメント」を掲げ,そこでの,「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて「アクティブ・ラーニング」の視点を掲げている。(文科省 2016,pp. 21-22.)

アクティブ・ラーニングは,「教員による一方的な講義形式の教育とは異なり,学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学修者が能動的に学修することによって,認知的,倫理的,社会的能力,教養,知識,経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習,問題解決学習,体験学習,調査学習等が含まれるが,教室内でのグループ・ディスカッション,ディベート,グループ・ワーク等も有効なアクティブ・ラーニングの方法である」(文科省 2012)(文部科学省の定義)とされており,ここではアクティブ・ラーニングとは何で,汎用的な能力の育成を目指すことを明確にしている。

「審議のまとめ(案)」もアクティブ・ラーニングの定義も,ゴール(目標)としての資質・能力を担保することを教育内容と教育方法に明確に課している点が特徴といえる。これは,同様に思考力,判断力,表現力等といった汎用的な能力の育成を目指した現行学習指導要領で,活用の方法として示された「言語活動の充実」が,それ自体を目的化したことを踏まえていると考えられる。

「各教科の指導に当たっては,生徒の思考力,判断力,表現力等をはぐくむ観点から,基礎的・基本的な知識及び技能の活用を図る学習活動を重視するとともに,言語に対する関心や理解を深め,言語に関する能力の育成を図る上で必要な言語環境を整え,生徒の言語活動を充実すること。」(文科省 2008a,pp.15.)

「言語活動の充実」は「思考力,判断力,表現力等をはぐくむ」という目的を先に示し,最後に「言語活動を充実すること」と示されているのに対して,アクティブ・ラーニングの定義は,何であるかを示す「学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称」が先に記され,「汎用的能力の育成を図る」という目的で締めくくっている。アクティブ・ラーニングは方法であり,目的である汎用的な能力を担保することが端的に示されている。これは言語活動の充実そのものが目的化したことによって,その意図が不明確になり汎用的な能力の育成に結びついていないという課題を踏まえたものと考えられる。(文科省 2015)

「言語活動の充実」はアクティブ・ラーニングの定義でも示されているような説明,討論など言語活動の充実で使われた教育方法を含めて,アクティブ・ラーニングが新しい方法ではなく,例示で示された既成の教育方法を含めた学習者の能動的な学習を指している。そしてその能動的な学習が汎用的な資質・能力の育成につながることを求めている。その意味ではアクティブ・ラーニングによる実践は,こ

れまでも行われてきており、目的とする汎用的な能力の育成につながった実践も数多く考えられる。また、アクティブ・ラーニングでは、授業での子どもにとって興味深い学習課題や発問、場の設定などが注目されるが、同時に日常的に主体的、能動的な学習態度の育成が必要であることも求められる。

そこで、能動的な学習が汎用的な資質・能力の育成につながる学習とは、どのようなものかについて、これまでの教育実践で数多く示されてきた過去の実践記録等（実践記録 1951）から明らかにすることを目的とした。

本論では、地域の漁業の後退を隣接する工業地域との関連で探究的な学習を展開した社会科実践「久慈の漁業」（鈴木正氣 1978）を基にアクティブ・ラーニングの視点からの分析を通して、汎用的な能力の育成を可能にする授業実践に必要な条件を明らかにすることを目的とした。

2. 社会科実践「久慈の漁業」の分析～授業成立の要因～

（1）討論授業の成立の要因

「久慈の漁業」の導入から展開前半の授業の記録（鈴木 1978, pp. 49-59）〔T：鈴木，P：児童 固有名詞：子供の名前〕を検討していく。該当授業は、前の時間の「久慈の漁業はいったい発展しているのだろうか」というテーマの授業で、理恵が出した「久慈の漁業は落ちぶれていないで、まだ発展しているのに、船に乗る人や働く人が減っているのはどうしてなのか」という疑問に対する小泉と菊池の意見を授業の導入に使って授業が展開していく。

小泉の意見：「きっと『工業と漁業』（グループの名称）の人たちが、工業があまりにも大きくなりすぎたため、漁業が小さくみえるためかんちがいしたんだろう」、「漁業で働いている人が少なくなったのは船が大型化して、よい機械などをとりつけたので、人手がそんなにいらなくなったので、その人たちは工業に移ったために漁業で働く人が減っているのだろう」

菊池の意見：「ぼくらだって、15 億円もうかるのと 33 億円もうかるのでは、33 億円もうかるほうがいい。それで若い人はみんな工業へ移ってしまったんだろう」

T いまちょっとぬき出して読んでみたんですけど、高崎は不安だという。理恵の方は疑問だという。小泉の方は機械化されたから人手はなくなったから、働く人は工業へ移ったという。菊池はなんというかというと、もうかる方へいくのはあたりまえだ、こういう言い方をするんだ。

だいぶ受け取り方がちがうんだ。みんなそれぞれ考えたんだろうけど、それじゃあですね、今日から少し、漁業は進歩しているのに、なぜ（と言いながら板書する）

漁業は進歩しているのに なぜ漁業人口が減ってしまったのか。

その辺を少していねいにみていきたいと思います。そこですね。小泉の考えと菊池の考えのちがい、わかりますか。

P ハイ、ハイ。

T これについてどうですか。考えがあったら出してください。（グループで相談し始める）

T ハイ それじゃ出してもらおう。じゃ、五来さん。

五来（女） 私たちのグループで相談したんですけども、小泉君のはおかしいんじゃないかというのが出たんですね。なぜかって言うと、あの、船に乗っている人を考えてみると、五人なら五人のほうが楽というか、便利という感じで、いくら機械化されても、人数の多いほうが楽なんで。あと菊池君の場合は、やっぱり、菊池君の言うとおりで、若い人は収入が多い方がいいだという考えでいるから、船に乗っている人は年をとっている人が多いので、菊池君の言うのが正しいんじゃないかと。

T なるほど、ハイ、じゃ三瓶。

三瓶（男） ハイ、アノ、菊池君と相談した時数えてもらったんですけど、小泉君の考えは、工業の場合は定年があつて（菊池らと相談する）・・・漁業の人が工業に移るとすると、若い人よりも年とった人がどんどん移るはずなのに、年とった人は漁業はやるけど、工業は定年退職があるから移れないから、小泉君の考えはおかしい。

宇佐美（男） ぼくも三瓶君とだいたい同じなんですけど、もしぼくが大人として漁業に入るとしたら、なんだか、みんな工業へ入っていくのに、自分だけ漁業に入るのははずかしいような感じで、今の若い人たちもそういう感じで、漁業はいやだというようになって、工業へ入って行って。それに漁業より今は工業の方が少し収入が多いから・・・小泉君のは少し変だ。

渡辺（女） みんなで相談したんですけど、今の若い人は、こう、ガメツイというか、そういう感じで、とにかくもうかればいいという感じで、やっぱり菊池君の方がいい。

T 菊池の方がいいと思うの。小泉は一人になっちゃったかな・・・じゃ小泉。

小泉（男） やっぱり、菊池君の考えもあると思うんですけど、機械化されれば人でもいらなくなるでしょ。それから出ていく人も多いと思うんです。まあ、それも半分ぐらいでしょうけどね。

T なるほど、そうすると、小泉の言ってるのは、漁業が進歩し、漁具も機械化され、漁船も大型化されて、人も少なくとも足りるようになった。だから工業に移った。ところが他の人の言うのは、工業のためにみんな吸いとられてしまったから、機械化して少ない人数でも漁業を成り立たせていかなければならないから、機械化しているというぐあいに言うわけだね。みんなの考えを少しすすめてはどう。

佐藤（女） 菊池君の方は、工業の方が収入が多くて工業の方に入る人が多いというんですけど、小泉の方は、漁業の方は機械化されているから、あまり手がかからないから、人口が減るということで、ちょっとちがいが出てくるというか、こう、漁業の減り方が、どちらをとり上げてみてもちがうんじゃないかと思います。

T ちがう？

菊池（男） あの、ぼくはさっき三瓶君が言ったように、本当に機械化が進んで、若い人が五人で年よりが五人いて、小泉君の言うように半分ですむとしたら、やはり年より五人をおいていくよりも、機械化されればよけい若いの方が機械に詳しいから、その若い人の五人をとってしまうから、結局年よりが残るんですけど、もし、その老人が工業に移るとしたら、漁業の方は自分で経営している、船を持ってやっているんですから、漁業の方はやっていけますけど、工業になつてしまうと、会社では定年があつて、そういう人は会社に勤められなくなってしまうし、また、年よりの考えだって、いままで涙を流してきたり、喜んできたりしたこの漁場を離れることはできるかい、という考えがあるから、小泉君のようにはないと思います。

T ならない？

山県（男） ぼくは菊池君の考えとはちがいますが、いま不景気で、漁業の人の方は少ないんですけど、工業の方は人があまっているから、漁業の方は、この次は人数は、多くなるんじゃないかと思う。

T いま不景気だから、もっと漁業の方が人数は多くなるんじゃないかとそんなふうに思う。出てきたね。いま収入のことが問題になってきているようなんですけど・・・、漁獲高はどうなんだ。

P あがっている。

T そう、少しずつあがっているんだね。工業の方はどうなっているか、ちょっとみましようね。(統計資料を出し、昭和三五年と四〇年の漁獲高と工業生産高を比べる)

　　こういうように工業生産高は非常に多いですね。まず、そのところを考える必要がありそうだね。小泉が言うように、機械化されて人手がいなくなったから、工業に移ってしまったのか、工業生産額をあげるために人手が必要で漁業人口が吸いとられてしまったのか。

P 菊池君の方だな。やっぱり、菊池君の方だ。

小泉(男) おれ、おりるよ。

T 高崎さん、それに理恵はどう？

高崎(女) だんだんわかってきた感じ。

理恵 まだよくわかんない。

T よし、ともかくこんなふうに日立の工業は工業の側から言えば、人をみんな集めながら、工業生産をどんどんあげていったということが言えそうだな。

　　そういうことが久慈にまともにでっかく現れてきた。そこから漁業をもういっぺんみなおしてみたいんだけどな。何だと思う？

P 日立商港、商港だ、商港……。

授業は、この後、工業を發展させている日立商港の拡大が沿岸漁業としての久慈の漁業を衰退させる要因になっていることに迫っていく。

こうした討論の授業は「言語活動の充実」の例としても挙げられている(文科省 2008b)。「久慈の漁業」で、このような討論の授業が可能になった要因について検討していく。

① 子どもの認識を使った授業方法

後述する「教材構成の視点(目標)」とも関わるが、この授業の冒頭は、久慈の漁業とそれに関わる様々な事象が、子どもたちの調査によって、子どもたちの眼前に広がる現在の現実としての事実が、歴史的な変遷まで踏まえて明らかになった事実として再登場してくる。この授業の冒頭に登場する「久慈の漁業はいったい發展しているのだろうか」というテーマによって形成された子どもたち個別の概念的知識をめぐる解釈の相違を導入に使うことで、この授業で漁業人口減少の理由に対する解釈が争点になりつつあることを子どもたちがつかんでいき、学習問題「漁業は進歩しているのに、なぜ漁業人口が減ってしまったのか」によって、考えることが明確になっている。こうした前時の学習や子どもたちの調査に対する認識を授業の冒頭に登場させて、学習を焦点化していく方法は以前から取られていた(若狭 1973)。

こうすることによって、これまでの授業の流れを踏まえた上で、授業の冒頭での考えの整理や学習課題が焦点化することにつながり、学習意欲が喚起され、討論の授業では、示された子どもの認識への賛否や共感から授業にスムーズに入ることができる。

② 学級づくり

前述の子どもの認識を使った授業が成立するには、何でも言える雰囲気と日常的な「書く」(表現)活動を取り入れた集団づくり(班・グループ活動)が前提となっている(白尾 2012)。

1) 個別の子ども理解

様々な家庭環境に育ち、個別の成長過程にあり、課題を抱える子ども一人一人について、行動、言動、家庭環境の理解を進めながら、学級での指導場面で適切な指導を積み重ねる。その過程で

学級での集団活動を生かすようにする。個人内評価を軸に子どもの表現（行動・言動）に対して適宜評価しながら、積極的な評価については褒め方を個別、集団、学級通信で取り上げる等の対外的な評価など、段階を意識しながら重ねていく。

2) 学級の組織化

学級は一般に必要な仕事や取組みとしての係と学級をまとめる際にリーダーシップをとる学級委員から組織される。各係は必要な活動に取り組むが、学級を日常的動かしていくリーダーは輪番制の日直である。日直が「1日のリーダー」としての自覚と責任をもって朝の会から帰りの会までを仕切る、そうした日常が当たり前の安定した学校生活の基盤の上に学習活動が組織される。

また係活動は決められた仕事をするだけでなく、仕事をする上で工夫し、朝の会や帰りの会で係としての情報発信をする係の意思や行動を表現する学級文化活動が中心になる。こうした活動に対して子ども相互や教師による積極的な評価・称賛が学級の規範意識をつくっていく。

3) 学習活動における個とグループの育成

学習活動での「問い」に対して常に、個としての考えをもつ時間と場を設定した上で、ペアや3人以上のグループ学習による集約の場を設定することで話し合いの技能を一人一人に育成する。

前掲の「授業の記録」では、授業者である鈴木が小泉と菊池の考えの違いを明らかにしながら、それに対する他者（高崎・理恵）の意見を紹介した後で、「漁業は進歩しているのに なぜ漁業人口が減ってしまったのか」というこの授業で考える問いを明示している。子どもたちはすぐに「ハイ、ハイ。」と反応し始めており、個としての考えをもつ時間がみえないが、「問い」が示されるまでに前掲「① 子どもの認識を使った授業方法」の手法によって、個が自分の考えをもち始めていたことがわかる。そして指示されなくても「グループで相談し始める」のである。

こうした子どもの話し合いの技能を含めた学習態度は、こうした授業が日常的に他の教科等でも行われていることを示している。授業でグループとしての「集約の場」を必ず位置づけることで、グループが個へ影響を与えることにつながり、その繰り返しの中で個がグループへ影響を及ぼすという相乗効果をつくりだしている。

以上のように、個別の子ども理解、学級の組織化、学習活動における個とグループの育成が柱となっている。これらは教師の学級づくりの指導の中で相互に関連したものになっている。こうした学級づくりがアクティブ・ラーニングの基盤であり、そこには安心して表現し生活できる学級があり、常に個と集団が関わる活動が用意されている。

(2) 教材構成の視点

① 「久慈の漁業」の教材構成の視点

「久慈の漁業」の成功は、前述した「討論授業の成立の要因」に加えて、周到に練られた授業づくりに特徴がある。鈴木は「久慈の漁業」の教材構成の視点を次のように示している。

「産業構造を規定する自然（資源）・生産用具（漁船）・協同労働の三つの要素から久慈の漁業を調べ、その変ぼうを工業との関連からおさえることによって、日立ひいては日本の産業のとらえ直しをする」（鈴木正氣、1978, pp. 61-62）

鈴木はこれを目標として実践を構成した。そこでは「久慈の漁業に固執することによって、日本産業

の特質を鋭くとらえる」(鈴木正氣, 1978,pp. 60) ことと「久慈の漁業に固執することによって, 親子ともども地域のとらえ直しをする」(鈴木正氣, 1978,pp. 60) ことをねらって, 自然資源・生産用具・協同労働と地域の「過程=変動」を教材として編成した。それが上記の「第3次 授業」の中心となっている。

鈴木がこうした教材構成をしたのは, 「日本産業の一般的特質は, 地域の特殊性に貫徹されるのであるが, しかし一般性自体は地域の特殊性によってしか成立しないという関係をもつ」(鈴木正氣, 1978,pp. 61) という基本認識からである。

鈴木は教材構成の視点の意味として次の三点を挙げている。(鈴木正氣, 1978,pp. 202)

- ・現代日本の産業構造の特質を, その変化の中でとらえる。
- ・現代日本の産業構造の特質を, 久慈の漁業に固執することでとらえる。
- ・久慈の漁業を, 自然資源・生産用具・協同労働からとらえる。

「現代日本の産業構造の特質を, その変化の中でとらえる」とは, 「過程=変動を明らかにしていく中でこそ, 現代社会の状況は認識されうるはずである」(鈴木正氣, 1978,pp. 203) という指導観に基づいて, 子どもたちのそれぞれのグループ調査に「過程=変動」が位置付けられていたことに表れている。教師が先行する社会認識に基づく指導観が, 問いに基づく調査という展開(教材構成)の過程で, 子どもにとって自然な社会認識の筋道として実現されてきた。

「現代日本の産業構造の特質を, 久慈の漁業に固執することでとらえる」ことについて, 鈴木は次のように説明している。(鈴木正氣, 1978,pp. 61)

「日本産業の一般的特質は, 地域の特殊性に貫徹されるのであるが, しかし一般性自体は地域の特殊性によってしか成立しないという関係をもつ。だから私は, 久慈の漁業に固執することによって, 日本の産業を一般的に扱わなくても, 久慈の漁業を深くとらえることがそのまま一般性をとらえることになるのだと考えた。」

このことは教材レベルでは, 子どもたちが地域の事実としての「過程=変動」をとらえる調査活動によって, その関係性を問うことで, 久慈の漁業の相対的な後退が日立の工業化と関連していることをつかんでいったことに表れている。そして「久慈の漁業を, 自然資源・生産用具・協同労働からとらえる」という子どもたちには見えやすい対象としての三つを教材として取り入れ, 「それらの変化をも含めた関係の追究によって, 実はその背後にある久慈という地域の生産労働や地域社会をみようとした」(鈴木正氣, 1978,pp. 204) のである。

以上のように, 先の「学級づくり」を前提とした学級にここに示した教材構成に基づく教育内容と方法を駆使してこの実践が成立している。

こうした教材構成をもつ鈴木実践の特徴について, 「子どもたち自身による自発的な問題の設定, およびその掘り下げが一貫して組織され, 彼ら自らが一定の答えを探り出していく学習が重視されていたこと」が指摘されている(斉藤 1983,pp. 279)。

これは後述する「久慈の漁業」の指導計画でも指摘するが, 見学の後にグループ調査が生まれ, このグループ編成の過程で「子どもたち自身による自発的な問題の設定」が行われ, 調査によって問題の掘り下げが進んでいく。そして, この調査を鈴木が「子どもたちが自らの問題意識に立って事実にくしくしながら自己の予測をたねんに検証していく過程としてとらえられていた」(斉藤 1983,pp. 281) と指摘した上で, 「鈴木にとって調査とは単に子どもの興味にうったえその自発的活動を引き出すことを目的とするものではなく, 子ども自身の認識の過程をつくり出すという意味を持っていたことを意味している。」と分析している(斉藤 1983,pp. 281)。さらに「地域の生産労働への科学的分析を軸にして, 地域学習の課題を構造化しようとする構想」であったとしている(斉藤 1983,pp. 287)。斉藤は, 鈴木に

よる地域の科学的な認識に基づいた教材構成と、調査とは相対的に独立した授業を中心とした教育方法から「久慈の漁業」実践が成立していることを示している。

また二杉孝司は次のように指摘している。(二杉 1979,pp. 42)

「久慈の漁業」で、子どもたちは教師に導かれながら、久慈の漁業を工業との関連で歴史的に追求し、久慈の漁業を科学的に認識したのである。その際、その科学性を保障したものは、子ども自身が調査の結果にもとづいて自分の思考を発展させたことと、教師の社会認識の質（ここには、当然、日本のなかの久慈という視点はあった）とであろう。(中略)「久慈の漁業」は、問題を見つけ、予想をたて、調査し、自説をもって授業にのぞみ、討論のなかではその自説を調査結果ら検証するという構造をもっている。それは「なぞとき」であり、科学の方法なのだが、子どもたちが「知る力」、「考える知識」といっているのは、なによりもこのことをさすのではないか。」

二杉の見解は、「久慈の漁業」における見学後の子どもたちによる問題意識と予測に基づいた調査によって明らかになった事実としての「過程=変動」の把握が、調査とは独立した授業によってその検証が求められる「なぞとき」の過程となることで、子どもたち主体的、能動的な討論につながっていったことを指摘している。つまり、明確な問い、問いに対する予測、予測を確かめる調査、そこで明らかになる地域の事実、そしてそこから明らかになった事実を使いながら、相対的に独立した形で取り込まれる教師による指導（授業）によって、「久慈の漁業」の討論が成立しているのである。別の角度では、「久慈の漁業」での教育内容と社会認識の特徴から、中西新太郎は「労働過程の理解が社会関係の認識を直接に支える」(中西 1982,pp. 220)として、次のように分析している(中西 1982,pp. 220-221)。

「労働過程を主軸において」「現代日本の産業構造をみる」ことは、労働過程の理解を支えにしてそれらをつうじて生産関係の認識にすむことを意味する。「川口港から外港へ」や「久慈の魚業」の実践では、「漁獲量(労働対象)、漁船(労働手段)、産業別人口(労働主体)」「産業構造を規定する自然(資源)、生産用具(漁船)、協同労働」という労働過程論にうらうちされた生産過程の分析をつうじて地域の変貌と産業構造の変動が、いいかえれば社会関係の変化がたぐりよせられていく。ここでも労働過程という使用価値的連関の変化(漁獲量の変化、漁船の機械化、漁業人口の減少等々)をとらえることが、つねに、その背後にある生産関係の変動を逆照するはたらきをしている。」

教育内容としての労働過程の追究(グループ調査)が、子どもたちの調査とは相対的に独立した授業及び、そこでの「問い」と討論によって、漁業内の生産関係と漁業と工業の関係を明らかにしていることを指摘している。「久慈の漁業」の授業は、方法的には二杉の指摘による、内容的には中西の指摘による、教育内容と教育方法を含めた教材構成によって活発な討論が行われ、子どもの社会認識が深まったことになる。それはこの討論の授業が発問や学級づくりといった個別の要素から成立したのではなく、それらを基盤にしなが、教師の先行した社会認識を基にした教材研究と教育内容の構成を基軸にした緻密な計画によって成立したことを示すものである。

(3) 指導計画づくりの特徴

この「久慈の漁業」の指導計画は以下のような構成である。

筆者による補足を吹き出しで書き加えた。

社会科実践「久慈の漁業」指導計画(鈴木正氣, 1978,pp. 62-64)

第1次 ・久慈漁港見学(2時間)・生鮮魚小売店見学(1時間)

第2次 ・グループ調査(2月末まで)

グループ調査は放課後あるいは土曜日などに行なうことを原則とする。週1回は進行状況の点検ならびに相談日をもうける。

漁業に関する見学を2か所行った上で、「問い」を出し合ってグループを編成にし、調査を行っている。この過程に子どもたちによる予想があり、「問い」と「予想」に基づいて調査が行われている。

- (私のクラスでできたグループは、「久慈のさかな」(6名),
「沿岸漁業と沖合漁業」(4名),「久慈漁業」(4名),「市場」(4名),
「日立港」(10名=2班),「日立の工業と久慈の漁業」(8名),であった。)
- ・中間報告提出 2月末日

中間報告では第2次のグループ調査の結果が第3次の授業で使えるように指導したことが予想される。

第3次 授業

- (1) 久慈の漁業は、日立の漁業の中でどのような位置を占めているか (1時間)

- ・日立の漁港
- ・昭和25年就業別人口(各地域)

- (2) 大正期と現在の久慈の職業別戸数から漁業を考える (1時間)

- ・職業別戸数(大正5年,昭和49年)
- ・大正10年ごろの職業一覧

- (3) 戦後の久慈の漁業を日立の産業別人口から考える (1時間)

- (4) 久慈の漁業は進歩しているか (2時間)

- ・漁獲高はどうか
- ・漁港の変遷はどうか・漁船の変化はどうか

- (5) 漁業が進歩しているのに漁業人口が

減少しているのはなぜか (4時間)

- ・工業生産と漁獲高の関係はどうなっているか
- ・日立港の役割は何か(商港の現在と建設計画—工業にとっては・・・,漁業にとっては・・・)
- ・大企業と中小企業,沖合と沿岸漁業・市場はどうなっているか(自港水揚げは・・・,他港水揚げは・・・。なぜ他港に水揚げされるのか)
- ・いさばやの昔と今

- (6) 学習のまとめ (1時間)

(1)～(3)で久慈の漁業の「過程=変動」の把握が目指されている。

「久慈の漁業」の現状から「過程=変動」を踏まえた上で、漁獲量の変化、漁船の機械化という進歩の側面を確認することで、漁業人口の減少という事実が矛盾として浮かび上がる「問い」をつくり出している。この問いに対する予想を基にして、工業との関連で考えていく中で、第1次のグループ調査の結果が活用される討論へと結びついている。この指導計画はこうした教師の先行する社会認識と教材構成によって、子どもの討論が可能になる構成になっている。

第4次 レポート作成

課題 久慈の漁業

(レポートは、第1次の久慈漁港見学から、第3次の学習のまとめ全般にわたること。レポートのテーマは、自分にひきつけたものとする。)

(4)「久慈の漁業」のその後からみる汎用的な能力

① 「第4次 レポート作成」から

「久慈の漁業」の授業で討論の重要な役割を果たした菊池はレポートで次のようにまとめた(鈴木正氣, 1978, pp. 163-164)。

ぼく達は、これらの研究で次の様なことがわかった。

まず、日立港がこれから開発されていけば、当然向こうなぎさはなくなり、工業が盛んになってくる。そうなれば、今の県営アパートのような住宅がいっぱい建ち並び、その人達が久慈の人口の多くを占めるようになる。漁業をする人達はますます少なくなり、場所はいまのべたような関係で、港まつりや水神様のお祭りはなくなってしまうのではないだろうか。

また、各地域の祭りも、世話人をやる様な人も減り、そのうち祭りはほとんどなくなるのではな

いだろうか。

このようなことから考えると、次のようになるのではないか。

・日立港の開発→漁業の低下→祭りが衰える。

これに対してぼく達が考えることは、久慈の漁業や祭りは昔から伝えられてきたものだ。だからと言って、日立港の開発をやめて、工業の発展をとめるわけにはいかないだろう。

つまり、今ぼく達がしなければならないのは、昔から伝えられてきた久慈の文化をひきついでいき、さらに工業にも目を向けていくということが大事である。

まとめてみると、昔から伝えられてきた久慈の文化を、久慈の人々で見直していき、残していく義務があるのではないか。(以下、略。)

ここには、地域の漁業と工業の関係を追究した学習を通して、地域の在り様や未来についての洞察がある。空想ではなく、学習を通して事実に基づいて思考した上での地域のとらえ直しがされている。

② 2年後の座談会

「久慈の漁業」の子どもたちは、2年後の中学1年の夏休みに集まって座談会を開いている。そこで3名の意見は次のようになっている(鈴木正氣, 1978, pp. 164-181)。

小泉： 他の学校からきた人は、教科書にでていないことなんか、要領よくつかむんですよね。だけど、今度教科書にない、自分の頭で考えることになると、いいことがでてこないんですよ。ぼくらは教科書に出てこないことがよくわかるんですよ。こういうこととこういうことは、こういうつながりがあるなんてね。

井上： 私たちは、未来というか今後どういうようになるか考える知識というか、そういうものをだいたい身につけたかどうかわからないけど、一応やったんだから、このことによって考え方というか、別の小学校からきた人は上っつらしかわからず、私たちの方は、未来の姿が、もっと詳しく考え出せるじゃないかと思うんです。

菊池： たとえば、ある道を通る車の台数を調べて、市道と国道を比べてグラフにただけでは調査でもなんでもなく、ただグラフを作ったというだけにすぎず、本当に大事なものは、作ったグラフのちがいで自分は何を考えるかということなんです。

「教科書に出てこないことがよくわかる」、「未来の姿が、もっと詳しく考え出せる」、「本当に大事なものは、作ったグラフのちがいで自分は何を考えるかということ」、これらは共通に事実に基づいて考える姿勢、態度ともいえる。実際に考える思考力、判断力、それらを表現する力までを含めて、そうした汎用的な能力を自分と対峙する事実に対して働かせようとする態度が身に付いている。

これは日常的な「学級づくり」での自治的な能力の育成と共に「久慈の漁業」などの教科教育をはじめとする科学的、文化的な探究過程が繰り返されることで、子どもたちに身に付いた能力であり、それが「久慈の漁業」の学習後、2年を経過しても子どもに残っていたことを示している。

3. 終わりに～「綴る」ことの重視～

鈴木正氣の社会科実践「久慈の漁業」を基にアクティブ・ラーニングの視点からの分析を通して、汎用的な能力の育成を可能にする授業実践に必要な条件について明らかにしてきた。

最初に「久慈の漁業」で討論が成立した直接の要因として「子どもの認識を使った授業方法」を示した。これは生活綴方教育では伝統的な手法で、個人としての認識を学級で共有する場合によく用いられてきた。しかし子どもたちの共感的に共有し、討論が成立するためには、それを受け止める学級集団の

質が求められる。鈴木学級では、集団づくりを念頭に置いた個別の子ども理解に基づく学級の組織化及び学習活動における個とグループの育成が図られていた。

また、アクティブ・ラーニングでは、授業での子どもにとって興味深い学習課題や発問、場の設定などが注目されるが、その基盤となる協働的で個を尊重する支持的風土のある学級づくりが前提であることを示している。

さらに、教師の先行した社会認識と深い教材研究に基づく教科の特質を踏まえた教材構成が重要であり、それらが上記の集団づくりと絡んだ教育方法として、内容と方法がセットになって指導計画づくりの特徴となって表れていた。

こうした条件のもとで社会科実践「久慈の漁業」が成立して、子どもたちの汎用的な能力の育成につながった。最後に、鈴木が子どもの社会認識の形成の上で重視していたことは「綴る」ことであったことを指摘しておく。鈴木は著者への書簡で次のように記している。(鈴木正氣, 2009)

「新しい世界を見た子どもたちが、それを自分自身にとって、地域にとってどういう意味があり、加えてそれによって子ども自身や地域の日常性の批判に発展しなければ、その認識はリアルなものになりませんし、実践自体がリアリティを失うことになるでしょう。それは「綴る」ことによって保障されると言えます。」

「綴る」ことは、生活綴り方教育の伝統的な教育方法とし受け継がれてきた。子どもの生活現実を直視してありのままに表現する生活綴り方は、生活そのものの認識の深まりと集団での思考を通した生活の主体者形成につながった教育であった。これを社会科という教科学習で実践することによって、子どもが自らの地域を深く認識していくことにつながることを見越して、鈴木は授業後に考えをまとめさせていた。それを「子どもの認識を使った授業方法」で示したように、授業の冒頭で紹介して授業を始め、本論でしてきた諸条件によって討論の授業が有効に成立していた。鈴木が「新しい世界を見た子どもたちが、それを自分自身にとって、地域にとってどういう意味があり、加えてそれによって子ども自身や地域の日常性の批判に発展しなければ、その認識はリアルなものになりません」と示しているように、「綴る」ことなしに社会認識の深まりは保障されない。また、「綴る」ことによってより明確になった自らの社会認識に基づいて討論の授業を組むことで、活発で主体的な討論の授業が成立したのである。

[文献]

二杉孝司, 1979, 「科学的社會認識の形成と地域—『川口港から外港へ』の提起するもの」『教育』国土社 374 : 42

実践記録, 無着成恭, 1951, 『山びこ学校』青銅社. 「一読総合法」 1951年, 「水道方式」 1958年, 「仮説実験授業」 1963年, 若狭蔵之助, 1970, 『高学年の社会科教室』明治図書. 鈴木正氣, 1978, 『川口港から外港へ』草土文化. 仲本正夫, 1979年, 『学力への挑戦』労働旬報社. などがある。

文部科学省, 2008a, 『小学校学習指導要領』. : pp.16.

———, 2008b, 『学習指導要領解説 国語編』. : pp.7.

———, 2012, 中央教育審議会「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ(答申)」の「用語集」, 文部科学省ホームページ, (2016年9月2日取得, www.mext.go.jp/component/b_menu/,,/1325048_3.pdf)

———, 2015, 資料6「言語活動の充実に関する検証改善の成果について」, 文部科学省ホームページ, (2016年9月2日取得, www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/,,/1358722.htm).

課題として「授業や単元の中で明確な意図を持った位置付けがされておらず、単なる話合いにとどまり形骸化していて、画一的な指導方法となっている例」が挙げられている。

また前掲の「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ（案）」では次のように指摘している。（pp. 11）（資質・能力の育成に向けた教育課程の課題）

「言語活動の充実、思考力・判断力・表現力等の育成に大きな成果を上げてきた一方で、子供たちが情報を的確に理解し、自分の考えの形成に生かしていけるようにするには依然として課題が指摘されている。言語活動を通じて、どのような力を育み伸ばすのかを、より明確にして実践していくことの必要性が浮かび上がっている。」

———，2016，中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ（案）」，文部科学省ホームページ

中西新太郎，1982，「社会科における『科学』の再把握—鈴木正気氏の実践と構想における労働過程の位置づけをめぐって—」『一橋論叢』87(2)

斉藤利彦，1983a，「地域に根ざす教育と科学的社会的認識の育成—1978年・鈴木正気「久慈の漁業」（五年生）の授業—」民教連社会科研究委員会編『社会科教育実践の歴史 記録と分析 小学校編』あゆみ出版

白尾裕志，2012，茨城県水戸市の自宅を訪問して聞き取った（2012年8月6日）。集団づくりは、学級での班活動、係等でのグループ活動など学級内の小集団の目的意識的な活動を通して学級としてのまとまりをつくっていくことを示す。組織や仕事、居場所などの働きを企図している。「班・グループ活動」と示したのは、席の位置を基準にした班とそれとは別の構成からなる係活動や企画上のグループや私的な集団も含めた表現である。

鈴木正気，1978，『川口港から外港へ』草土文化。

鈴木正気。1931年～2014年。茨城県の小学校教師。民間教育研究団体の教育科学研究会に所属して1960年代から1980年代にかけて小学校社会科の創造的な実践に取り組んだ。主な著書に『川口港から外港へ』（1978年）、草土文化、『学校探検から自動車工業へ』（1983年）、あゆみ出版などがある。

———，2009，鈴木正気の白尾裕志宛書簡（2009年12月28日）書簡の掲載に当たっては、御遺族から平成28年10月19日付で書面での許可を頂いた。

若狭蔵之助，1973，『民衆像に学ぶ』地歴社. : 55-56

教育科学研究会に属する鈴木正気の「久慈の漁業」は1975年2月～3月の実践である。日本生活教育連盟の若狭蔵之助の「児童公園をつくらせたせっちゃんのおばさんたち」（6年生社会科）は、1969年4月の実践あるが、調べ学習に結びつけるために冒頭で、児童公園について子どもたちの考えを発表させてから、調べ学習に入っている。